

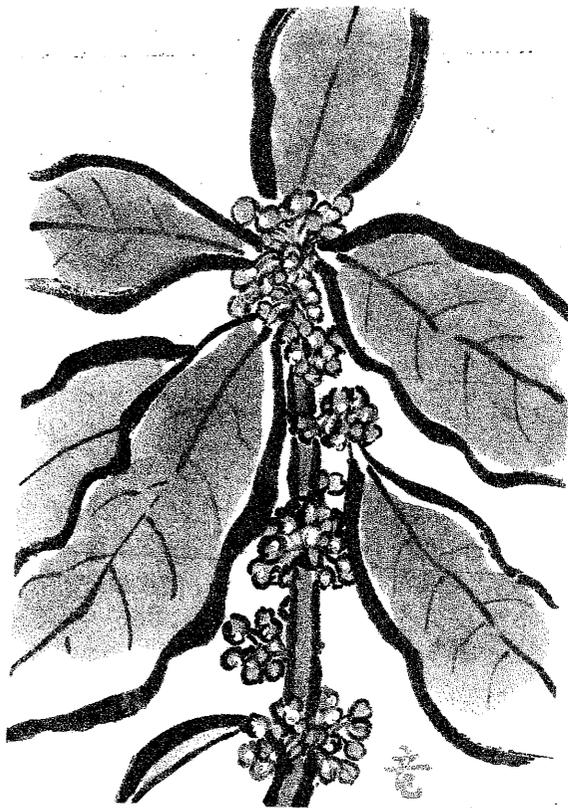
# オリーブの樹

第140号

2017年11月26日

## شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



キニモクセイ  
胸いぱいに  
香受けて  
台風一過の  
獄庭を歩く

### 目次

- P 2 秋の歌 重信房子
- P 3 独居より 重信房子
- P 8 読んだ本 重信房子
- P12 10・8羽田闘争50周年 山崎博昭追悼集会報告
- P16 「ハルフォア宣言」の時代とパレスチナ 重信房子

重信房子さんを支える会

重信 房子

稲架はさ続く日本の秋が格別に美しかった逮捕の車窓

獄窓に横なぐりの雨暗い朝どこから届くかキンモクセイの香

獄塚の色づき始む桜木を越えゆく自由の精霊とんぼ

台風の傍若無人立ち去ればコスモス一斉天に向き咲く

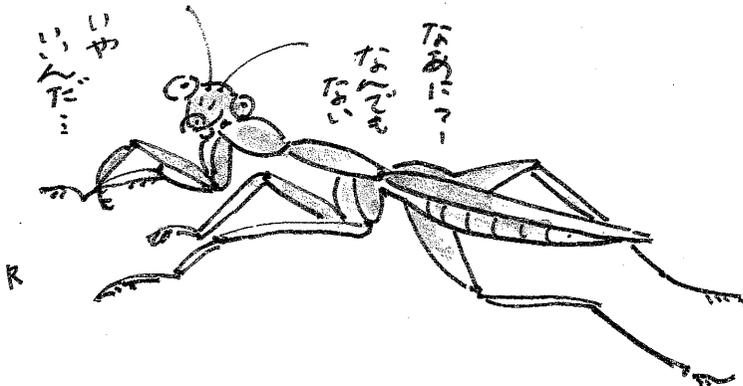
格子越し遠い光に目を凝らし雲間を過ぎる満月を眺むる

夏草の匂い届きてふりむけば晩夏の獄に小雨降り初はじむ

連赤の遺族の怒り胸を刺す解けず終わらぬ時代の過ち

ゆっくりと旋回しては下降する命の最後を楽しむトンボら

獄壁のアメフリアサガオ蔓伸ばし大暑の天を仰ぎて咲きぬ



独居よ！ 8月19日~11月8日

### 改憲阻止に向けた

### 地域からの暮らしの闘いこそが決定要因

重信 房子

8月19日 久しぶりの晴れ間に蝉が鳴いてにぎやかな夏！と思ったら、夕方から大雨。今年は、もうクラッとすたる灼熱は味わえないままに秋に向かうのでしょうか。もう一回くらい「暑い！」とバテる程の夏が欲しい！ Kさん残暑見舞いありがとう！

「送り盆で主人を送りました」とあります。しみじみと逝った人を、ありがたく思い返される季節ですね。それに、めずらしい「黒ほおずき」または「神代ほおずき」という、初めて見る写真、ありがとう！信州の花ですってね。ほおずきやナスの花と似ていて、ナス科の植物ですね。Kさんの庭には、いっぱい知らない花が咲いています。そちらもお元気で。お盆休みを終えつつ、資料や本を整理しています。

「マコの宝物」を、また読み返しました。自分を創りあげてきた懐かしい時代を振り返るとき、どんなに多くの思いやりや愛情に支えられてきたのか、思い出させてくれる本です。マコは、ありのままの自分を、心の中で葛藤しながら育てていく、一つ一つの物語が聡いマコを育てていく姿がとてもよく伝わってきます。今の人生様々を経験してきたマコの総括なのでしょう。自分にも共通するような体験があったな……と、心のひだから記憶が私にも零れてきます。「くじらうり」「ハーモニカ」が好きです。マコはガキ大将じいさまと似ているなあ！と発見したり。この本を親類の人に送ろうと思い、読み返していると、温かい気持ちがあふれてきます。

8月21日 連休全体が明けたようですが、まだ学校は夏休みです。7月に雨が降らなかった分、8月は梅雨じめり続き、今日も曇天です。

今日は午後CT検査。昼は延食です。今日は血圧が低く、98と57ですが元気。CT撮影も、主治医がCVポートから造影剤を投入します。すぐに終了。戻って、よく食べました。いつもはお腹がすかないうちに食事の時間になるのですが、今日は14時からだったので、しっかり食べました。

Uさんより、8月13日のNHKスペシャル731部隊は、圧巻だったとのこと。それらの医者らは戦

後、日本の医学界の「重鎮」として君臨し続けてきたことも、実名で報道しているとのこと。それを8月16日に、中国が評価したという朝日の記事もつけて送ってくれました。感謝！

8月31日 あっという間に八月尽。今日は台風の影響で肌寒い日となりました。Yさんが送って下さった連赤関連の高原さんの文章、今日受け取りました。同時に受け取ったUくんが送ってくれたものと重なるものもありました。「赤軍派が残した3つの問題 連合赤軍とよど号ハイジャックと日本赤軍 人民闘争の中で対応を考えて下さい。2017年6月23日高原浩之」という文で各方面に配られているようです。

(1)が「連合赤軍45周年集会」批判。集会はなぜ殺された家族の感情を踏みにじるようなことをやるのか！と怒りの批判です。自分は赤軍派の7名の最高指導部の1人で、かつ殺された遠山美枝子の夫という二重の立場に立って文章を書いている、としています。集会には「路線の総括がない」と批判し、総括がない分センセーショナルに上辺だけ見てTVなどマスコミと同質であり、個人的資質論になるか、殺された者の家族の感情を踏みにじるしかない、と批判しています。

「この集会は、教訓は引き出すことが出来ないにもかかわらず、殺された者の家族の感情に何の配慮もせず、逆にそれを踏みにじている。加えて、植垣など、生き残った（正確には他人を殺して自分が生き残った）連中に免罪符を与えている」と批判しています。高原さんが連赤の犠牲になった遺族の心情を代弁していることはとっっても理解できます。遺族の方々への配慮に欠けた面も人選やテーマでもあったのかもしれませんが。

でも高原さんは「赤軍派の指導部の一人として」と「遠山さんの夫として」の二重の立場に立つとつつ「家族としての立場」から「目には目を」の思想で告発批判しているように思えてなりません。「指導部の一員」の自己批判と責任の側からの思想的実

踐的立場が欠落しているように感じてしまいました。酷な要求かもしれませんが、指導部であった高原さんこそが煉獄の犠牲者家族の苦しみを越えて、植垣さんと真正面から会い総括を求めてほしいと思います。そのこと抜きに「人民闘争の中での」総括は終わらないと思います。

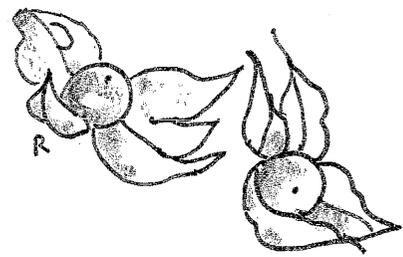
「加害」の人々（この人々も十分苦しんで来たと思います）と犠牲者の家族は和解出来ないとしても、同じ運動でリーダーの一人だった高原さんこそ「加害」の人々の真摯な謝罪を橋渡しをしながら遺族をねぎらい教訓を整理していく責務があると思います。

「加害」の人々もあなたが導いた人々なのです。赤軍派や狭い身内からではなく、人民的に見れば赤軍派も連赤も「党の役割」を果たさなかったことにおいて皆「加害」の位置にいるとも言えます。私含め「加害」よりも被った「被害」の側に身を置きがちです。

2000年に逮捕された後、接見禁止の解けた2008年からいろいろな人々に会えました。ある時面会した青砥さんから、赤軍派に彼が参加したきつかけが私だと知りました。初の赤軍派の政治集会に上京した青砥さんに会場の受付係の私が、赤軍派指導部に会うようにと引き合わせたとのこと。そうか……そのように私も人々の人生を転ずることをやってきたのだ……と改めて自覚しました。特に現思研の仲間たちには強くその責任を実感しています。遠山さんにもです。みな相互関係の中で過ちを再生産していました。「非加害」の側に身を置いては見えないものもあります。赤軍派も連赤もまたそのような「被害」や「加害」不可分の中にあると思います。

高原さんの今回の批判が新しい何かを生み、共謀罪、安保法、改憲へと国家主義強権で進む日本の現実の流れに有効に抗する現在の実践に連なることを願っています。

9月4日 もうすっかり秋です。今日は房内検査で荷物整理（他の人より多い）を指示されました。資



料や本など宅配で減らしているのですが根本的に改めねばなりません。Uさん退院出来てよかったですね。入院中の数日の間に稲刈りが終わって残念がっています。資料ありがとうございます。

9月12日 今日はN和尚が法要面会に来てくれました。メイの友人のMちゃんも一緒に、兄の三回忌と彼岸、みんなの年中安泰や私の病氣平癒も併せて祈念してもらいました。法華経を私も黙読しますが、なかなかお経についていくのが難しいです。でも、心地よい一時を与えてもらった感じです。感謝です。残った時間を、私に手紙や資料、書籍などを送ってくださる友人への感謝や話などで、あつという間の貴重な時間、「あと3分!」と、たちまち30分は終了。ありがとうございます。

四方田先生からのお便りは、アテネからです。「ここが『ヨーロッパの永遠の子供時代だ』(ヘーゲル)などではいささかもなく、エジプト文明の模倣から始まり、フェニキアから文字を借り受けて形成された場所だということでした。ヨーロッパ中心主義のおかげで、今のギリシャはオリンピックを開かされたり、EUに組み込まれたり、好き放題に動かされている、という印象を持ちました」とあります。地中海の文明・文化は、中東圏が先進ですものね。地中海の街が思い出されます。10月はいろいろ日本で多忙です。どうぞ健康で。もう大手術の影響はないようです。

9月14日 今日は、午前中の運動(ベランダ)の終わるころ、診察の呼び出し。汗がおさまらない中、汗を拭き拭き診察室へ。今日は胃カメラやCTの映像写真で説明して下さる予定です。ノートを房にとりに戻って診察室に入ると、CTフィルムに光を当てる台に乗せて、DRが熱心に注視しているところでした。CT写真を見る専門家が、肝臓に少し異変があると、主治医に伝えたとのこと。まだ小さい点のような黒いものがいくつか写っていることを示して、「あなたは肝炎を患ったことがないので、原発性の肝臓癌はありえないが、大腸・小腸からの転移はありうる。これが何か、専門家はまだ判断できないので経緯観察することになっている」と、おっしゃっていました。

CTに写るのは最低どの位の大きさか?と尋ねると、「5mm位なのでしょう。5mm以下はCTに写らないというので、5mm位なのでしょう。何か癌でない

ものかもしれない、心配しても無意味なので気にしないように」とのこと。CTを頻りにやって放射線を浴びるのは良くないので、3か月後くらいにまた、CTを撮ることになりました。「定期的にチェックしてもらっているの、異変も早く発見できて良かったと思う」と伝えて、CVポートのフラッシュをして診察を終えました。

9月22日 安倍首相と菅官房は露骨な解散方針。国民は怒らないのか? 北の脅威を利用して大勝狙い。でも保守乱立で浮動票が安倍に投げられるかは疑問です。それにしても米の戦争政策に舞い上がって、更なる圧力を求める安倍は国際社会で良識すらかなぐり捨てているよう。これも全部米トランプと国民向けの選挙対策でしょう。

米元大統領のジミー・カーターは94年の戦争危機をトーンダウンさせ、北とも対話をさせた人物ですが、9月12日にトランプを批判しています。「米国は休戦協定を平和条約に格上げすべきで、そのためにトランプは金委員長と直接話し合うべきだ」と述べています。米が軍事合同演習を止めるところからアジアの緊張緩和がはじまるはず。「核がある」という事実を確認しているのに米・日で「認めない」という方が危険です。北の核を認め、核管理体制を共同する方が戦略的選択肢でしょう。

9月28日 新聞を見ると「希望の党結党会見」綱領「寛容な改革保守」(27日夕刊)「民進の『希望』合流提案へ」「前原氏党公認出さず」(28日夕刊)と「希望」の改憲踏絵によって民進党をバラバラにさせる道へと小池、前原で話が進んだようです。

リベラルを排除し、安倍自民党と小池非自民党の両改憲勢力の政権を問う選挙とか。とりあえず安倍自民党と対決しつつ、公明党と連携して「希望」で政権狙いの小池流。でも自民より右も含めて「希望」に右潮流が続々参じています。政策で一致する野党勢力の育成に市民的リベラルの柱は今のところないようです。

共産党らを戦略的には支援しつつ当面「反『安倍自民』実現」が現実的なのか? 小池はもともとタカ派。流動はいいけれど民進は解体するし、その先が恐ろしい。もっとも自民の負けな小選挙区。しがらみ自民対公認欲しい雑多な「希望」という改憲勢力同士。「日本が変わる危険な選挙」となるのでしょうか。

9月28日第二インディファードから17年目。パレスチナではネタニヤフの強権益々アラブの混乱を望み、シリア内戦介入ばかりか昔からクルド支援。クルド独立支持はイスラエルばかりか米も本音は同じ。中東の戦乱は新たな火種を広げつつあります。一方ガザの「人道危機」は9月11日今年からハマースの新政治局長になったイスマイル・ハニヤがカイロでエジプト高官と討議し、その圧力がハマースの「ガザ行政委員会」解散に合意したとのこと。

17日ハマースが正式にガザ行政委を解散し総選挙に応じると表明。これに対してPFLPは歓迎を表明し、アッパース大統領府のイスラエルと一体のガザに対する措置停止を求めています。そして分裂を終わらせるためのPNC開催による政治プログラム合意の討議の続行を求めました。パレスチナに新しい動きは生まれるでしょうか?

様々に変化する世界を座して見つめるしかないのですが、心を鍛え判断を常に自己検証しながら72才の一步を再び歩みはじめます。酉年のバースデー! みんなに感謝を伝えます。

P.S. 今点呼も終わり夜になってこの一年をふりかえろうとノートを開けたところで、今日の郵便物が届きました。うれしい! バースデーの祝いのお便りも届きました。Tさんありがとう! I子さんありがとう。丁度スペースがなくなったので次回にお礼方々お伝えします。Cさんもありがとう!

9月30日 小池「希望」公認に「安保・憲法観の一致が条件」と表明。逆にこれでよかったのでしょうか。民進党の水と油の改憲派とリベラル系が分かれて、市民の受け皿に「民進党」または新党で闘う条件がつけられるでしょう。でも、いつもリベラル派は戦略なしの後手後手。リーダーシップ不在です。共産党も実態にふさわしく名称変更し、国民の利益の側の受け皿を大きく育ててほしいものです。あつという間に九月尽です。

10月2日 ラジオのスポットニュースで、枝野らが「立憲民主党」を結成するとのこと。国民の大多数は、九条改憲を望んでいないので、それを實現する野党や市民の受け皿ができるならいいことです。

10月5日 デジカメ歌人の、ユヌモスにテントウ虫の秋分のお便り、感謝。「希望は野望に変わり『国難』は、自由平等平和を押し潰すのでしょうか。...

…せめて今年は、秋の爽やかな空気を吸っておきたい」とあります。“野分荒れ倒れたる稲株ごとに刈り取る男に強気を想う”そんな秋です。今年も10月の円山公園反戦集いに行きますよね?! いつもさわさわの旗、ありがとう!

**10月8日** 今日は秋晴れ。今日までに「かつて10・8羽田闘争があった」を読み終えようと思いましたが、616頁もあってまだあと少し。大事な524頁からの「五〇年目の真相究明—山崎博昭君の死因をめぐって」の途中です。あの時の状況、精神、健全な世論と暴徒攻撃の警察、マスコミを思い返しながらかいています。

**10月10日** 今日衆院選公示。新聞休刊日でニュースも自由に聞けない房では気になります。「反安倍政権」で登場しては「希望」が、小池の「さらさらない」選別発言で流動。「立憲民主党」には「連合東京」まで支援を決めるほど追い風に。しかしマスコミ操作の自民党はこぞって小池個人や希望に批判を焦点化。そのお陰で安倍自民は漁夫の利の選挙になっています。どう考えたって「立憲民主」に刺客をたてる「希望」には希望がない。小池都知事選勝利も「風」もあったが「連合東京」や公明党の力が支えたのが大きかったのに。小池のあまりの政局作りや策略のあれこれも、実際に安保法制支持だし、鼻について国民も引いてしまっているのでは? それをマスコミが煽っている感じです。いつものように選挙でいじめられる役は、今回「希望」に向いて、「立憲民主党」への勢いには向いてないようです。何とか「立憲民主」「社民」「共産」が一議席でも多く!

**10月13日** Mさんの便りで、10月5日の名古屋泉水国賠訴訟控訴審「ほぼ完全勝利でした。」と知り、嬉しくなりました。「面会・手紙という交通権は刑務所の受刑者の更生・社会復帰にとっていかに重要なものか」ということ、また外部の者にとっても受刑者との間でのコミュニケーションを通して人格の発展が図られる。この権利が剥奪されるようなことがあってはならない大切な事柄であるという、我々原告側の主張した趣旨が全面的に認められた画期的な判決でした。」とのこと、本当に良かった。苦勞された弁護士に感謝し、泉水さん含め原告の方々に連帯!

そして泉水さんの「与作」の歌をアラブで歌ったという松下竜一さんの本からのエピソードを泉水さんの人柄共々語っています。

**10月18日** Kさん、またまっさお?! の見事な朝顔に、濃いピンクのゲンショウコの花。きれいな庭の名残の花です。「3日前、Sさんが墓参に来てくださいました」とのこと。遠くから友情が深く続いている様子、いろんな話ができたでしょう!? 秋はまた京都に行くのでしょうか。みな一つづつ歳を取りつつ、昔と変わらぬ友情が更に深まるのはうれしいですね。

**10月24日** 今日、全当選者の確定した新聞が届きました。3分の2以上の改憲派ばかり(当選者の8割超)投票率53.68と低い分、自民に有利だったようです。今回の選挙では、国民の声を反映したのは立憲民主党、という側面が次の可能性ですね。

自民党は、得票率比例区では33.3%ですから、全有権者の20%以下(17.5%)です。それが、全体を転換させる改憲に導こうと、再び政権を支配する日本です。東京ブロックでは、比例区の投票先は、自民30.42%、立憲23.58%、希望17.44%、公明10.81%、共産10.37%、維新3.32%、社民0.95%でした。共産、社民支持が「立憲」に流れたのです。

朝日新聞の試算では、小選挙区で、分裂野党の226区で与党が8割勝利して、野党共闘が実現していたら、63小選挙区で逆転していたとのこと。単純にそう言い切れないとしても、互角に近い状態はつくられたでしょう。今回の選挙の教訓は、安倍政権に対して旗色を鮮明にして、かつ、保守層を含みうる国民的合意を示せば、政権交代に迫りうる、ということでしょう。

「国民的合意」は改憲に向かっているのに(ことに9条)国会議員8割超が改憲の方向を向いていて、これから国の形を変えそうです。「天皇退位」「東京オリンピック」と、安倍政権の煽る「北朝鮮」と合わせて、大衆操作・国家主義が強まりそう。でも「立憲」が第一野党として、しっかり市民と連帯し、右に引っ張られずに野党共闘を作り出せば、無党派層が支えるかもしれません。ニュースやTVのない獄で、新聞を読みつつ考えています。変化は流動をもたらすので良いことです。「自民」「希望」「維新」の似た者同士の路線にも、「情報公開」など違いもあるし、改憲以外で安倍政権を変える流れは作れない

のか……と。「希望」も分裂や脱党もあるでしょうし。まずは「立憲」が数合わせより、市民・国民の投票の意図を汲んで今後進めば、5年10年後に期待できます。

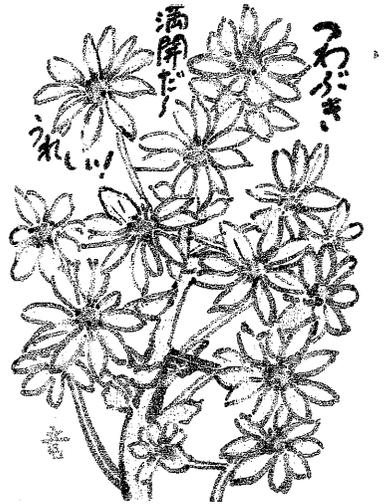
パレスチナでは9月以来、ファタハとハマースの政治的和解が表明されています。12月1日にはガザ・西岸地区の統一政府が成立する予定で、話し合いを他の組織含めて行っています。しかし、米・イスラエルの介入と「オスロ合意」に縛られたパレスチナ自治政府の要求に、ハマースが「降伏」しない限り、実効性ある「統一政府」は難しい。その要は、ハマースの軍事部門の「解体」についてです。ハマースを含む反占領闘争(非武装も武装も)は、イスラエルの占領と表裏の関係にある分、イスラエルが武力と「封鎖」を解かない中で、ハマースが武装解除できるのか、疑問です。

常にイスラエルの介入で、パレスチナ内の対立は増幅させられてきたのですが、ネタニヤフは、すでにパレスチナ自治政府のファタハとハマースの統一政府が発足しても、和平交渉しない方針を決定しています。そして、ハマースの「イスラエルの国家承認、軍事部門の解体」などを主張しています。

「オスロ合意」では、イスラエルの承認・合意なしには、何事も成立しない構造がつけられており、自治政府が、イスラエルとの保安共同で「反テロ」の名で、反占領闘争を弾圧しつつ、もう一方の手で「統一政府」を目指しているのは二律背反です。その本質は、ハマースの武装解除を狙っているのが、米・イスラエル・パレスチナアッパーズ派らの思惑です。それを承知の上で、戦略的な前進のため、ハマースが「非武装」を受け入れるでしょうか。しかし、受け入れても、更に高いハードルを設定している米・イスラエルです。パレスチナの統一は「オスロ合意の脱却」以外、成立しません。

また、米・イスラエル・アッパーズ派の望む「統一」には、パレスチナの分裂しか成り立たないのが現状です。12月の統一政府発足を期待するパレスチナ人はほとんどですが、その実効性や持続可能性は、ほとんどのパレスチナ人は難しいと知っています。何故なら、パレスチナレベルの決定が生かされていないからです。

今日は久しぶりのグラウンド運動。もう桜の木が色づき落葉しています。それでも黄蝶、紋白蝶が舞い、タンポポが咲いている八王子です。気持ちの良い野外運動です。



**10月31日** もう10月尽。屋外に出ると、厚い雲間に青空があり、曇ったかと思うと太陽が射し込む暖かい秋。もう桜の紅葉が塀際の並木を美しく愛えています。

メルマガで10月14日の「ガーディアン紙」とのインタビューで元英首相のトニー・ブレアのこんな言葉を知りました。「ハマースをボイコットしたのは誤りだ。」「今考えれば、ハマースを対話の場に引き込み、彼らの態度を変える試みをすべきだった。イスラエルが強硬に反対していて、それは難しかった」などと述べています。外部のご都合主義の介入は、結局強硬なイスラエル政府の言いなりで、米国が後押しして「国際社会」の意見にさせてしまい、誤った道を作りました。

ファタハも自らの利益と外国援助金で成り立つ政府の現状維持で、現在に至る対立まで続きました。11月の統一のための全パレスチナ勢力の話し合いに注目したい。

**11月6日** トランプの訪日。世界には、「米国支配下の日本」を見せつけてくれた安倍首相です。イバンカへの対応も異様でした。国民ではなく、米大統領付度の日本の首相です。

**11月7日** ロシア革命百年目です。革命をヒューマニズムの実現として世界の労働者たちは考え、西から東へと芸術家らも亡命していきました。労働者階級、自らを解放することによって、例外なく社会成員を解放する能力を持った階級としてヒューマニズムが描かれ、マルクスからレーニンへと。でもロシア革命によって、新しい世界が拓き、ロシアの地方性を「普遍性」として、それを教条したり押し付

けたり。多くの過ちもあったけど、ロシア革命によって、資本主義も分配や社会福祉など成熟させざるを得なかったし、世界の抑圧された人々が結び合う力を育てたので、やっぱり偉大な現代史の出発点でしたね。

今日は立冬。それなのに、タンポポや銀ヤシマが独り飛んでいました。暖かい小春日和のロシア革命記念日です。公正な富の分配、金銭に支配されない人間性の連帯、益々変革の必要を実感しつつ歩んでみました。

11月8日 一転して小雨曇天の八王子。今日は17年目の逮捕記念日。様々の想いが胸をめぐります。あの人はどうしているだろう、まだ生きておられるか……と、当時の様々な国の友人たち含めて、断ち切れてしまった関係のその後を想像しています。お詫びと感謝しかありません。変革や闘った連帯の誇りに、反省すべき多くの事柄が軽々とならないよう心して進みます。これまでのみんなの支援・友情に感謝し、再会を誓って学び、心身鍛えねば!と強く希求する逮捕記念日です。いつもありがとうございます。

午後は診察。11月の採血検査の結果を伝えてくれました。消化管2種類の腫瘍マーカーと肝臓2種類の計4種類の腫瘍マーカーの結果、全部正常の範囲にとどまっています。肝臓もたとえ癌でも、まだ腫瘍マーカーに数値が現れる程の大きさではありませんし、今のところは正常範囲でホッとしました。

トランプは上機嫌で日本を立ちました。北朝鮮への強硬策を相乗りし合っている2人、国際視野で安倍政権の危険をとらえる必要があります。結局安倍政権の刺客だったような小池知事のあるまい。野党の信頼回復は立憲民主党の誠実なあり方にかかっています。改憲阻止に向けた、暮らしの地域からの闘いが決定要因と切実な時を迎えています。

11月9日 今日、受け取った「支援連ニュース」

## 読んだ本

重信 房子

「見ることの塩 パレスチナ・セルビア紀行」(四方田大彦著) 作品社刊を読みました。

この本は、著者が2004年3月から6月にかけて、イスラエルのテルアビブ大学に滞在した見聞を第一部とし、第二部は同年10月から12月にセル

ビアのベオグラード大学とコソヴォのプリシュティナ大学の客員教授として見聞した内容とその思索によって構成されている本です。

「2006年の監獄法廃止と、その後の『刑事被収容者処遇法』は、社会関係を遮断する監獄法の考え方を改め、広く外部交通が認められるようにすべき、と規定しているのとらえ、外部交通を積極的に認め、交友関係の維持も、通常の交友関係であれば足り、その長短や濃淡は問わないとして、受刑者との面会それ自体が改善更正と社会復帰に資するものであるから、刑事施設の長の裁量の幅は、相当程度制限されるものと解され」と、判決で述べているとのこと。当然でまっとうな判決です。

施行の当初は法に則って面会、私も可能で友人たちと会いました。ところが2011年秋から、八王子でも親族と、特別な理由、身元引受人以外、不可となりました。泉水さんの判決勝利によって、今後運用幅が広がるというのですが…。

また、「日本赤軍云々」という国・被告の論理も、すでに解散しており、面会や交通があったとしても、他のメンバーと意思を通じるとか、刑事施設の規律や秩序を害したり矯正処遇の実施に支障を生ずるおそれがあったとは認められない、との判決。これで、泉水さんを案じて面会してきた戸平さんもまた会えますね。親しかった間柄、友人として家族として、再び面会可能は嬉しいですね。

この裁判を、無給で徹底して論理的に裁判所に訴え続けてくださった安田弁護士、山下弁護士には、心からお礼を申し上げます。亜人さんから、どうか伝えてください。また、共に闘ってくださった皆さん、ありがとうございます! まだ、他の泉水さんの公判が続きますが、泉水さんも元気で闘いを選択したことで受けた嫌がらせなど、乗り越えて進むと確信しています。藤山雅行裁判長に、国は上告の論理なく諦め、勝利確定! ですって。うれしいですね。このニュース。

ちやうどイスラエルはシャロン政権下の激動の続く時代に当たります。著者は徹底したフィールド

ワークと粘り強い観察の中から、現在のイスラエルの隙間に残る建国前のパレスチナの数々を発見していきます。それを分析し、比較し、著者が立ち位置を深めていく様子を私も追体験する思いで読みました。

私がベイルートやアラブ諸国の地から見詰めてきたイスラエルの内部の様々な老若男女の声——それはシオニズムの中に生活する人々のいろいろな層の人々の声——がとつてもリアルに浮かびます。著者はたった4か月の滞在でも、蓄積された問題意識で探検家のように路地から路地へと失われたパレスチナの街や家族を追跡し描いています。テルアビブの街もそういう風に作られてきたのかと、私も理解を得ました。

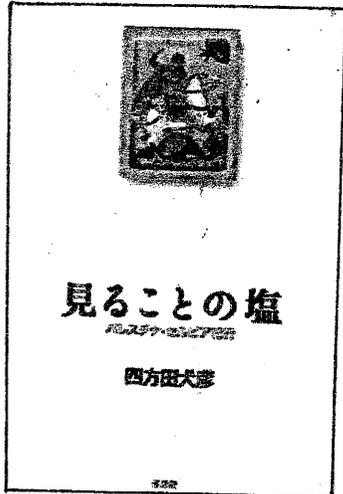
著者がヤーファで知らないうちにアラブ人居住地に行き当たったり、エルサレムのハラム・アッシュリーフの様子。おしゃべりに興じていたアラブの中年老齢の女性たちがアジア人の著者に気付いて、親しげに手招きして、ピーマンの詰め物やぶどうの葉で巻いたアラブ料理を次々と手渡してくれたというエピソードがあります。

「私はうれしかった。長らくパレスチナ解放闘争に共感を示していた私の作家ジャン・ジュネが理想の母親として求めていたのは、こうした敏待と慈悲の権化のような女たちだったのではないだろうか」と私に話してくれたという箇所を読んで、これがアラブの人々の日常的な姿、貧しく、しかし気高い倫理を持つ難民キャンプの友人たちの母親を思い出して胸が熱くなりました。

「イスラエルの国道を車で走ると『ヨルダンパレスチナ人の国。移動(トランスファー)こそ平和と安全の第一歩』という掲示がよく目に付いた。『移動』と言えば聞こえがいいが、アラブ人を追放するために用いられる用語である。だが、皮肉なことに実際にイスラエルを離れていくのはユダヤ人である」と、著者は第二次インティファダの後3年間に20万人のユダヤ人が米などに移住したことを記している。

また、著者が滞在中にモルデハイ・ヴァヌが4月21日に釈放されたことにも触れています。ヴァヌは、1986年に、ロンドンでイスラエルの核兵器開発の実態を自分が技術者として従事していたネグブ砂漠のディナモ秘密基地の証拠を示して告発しました。

ところが、イタリアでモサドに拉致されて、国内



に連れ戻され国家反逆罪で18年の禁固を科されました。服役し、ヴァヌは49歳で出所したところでした。

会見で、ヴァヌは「私ことモルデハイ・ヴァヌは言う。ユダヤ人国家など必要ない。イスラエルには住みたいと思わない。もうイスラエルなどいらない。イスラエルは核兵器を持つ必要がない。とりわけ現在、すべての中東国家は核兵器から解放されるべきだ」と述べたと著者は記しています。ヴァヌは、その後もイスラエルの敵意に包囲されつつ、告発を続け、出国やジャーナリストとの接触を禁止されたり、その後も拘束されながら、イスラエル政府と闘い続けています。

また、著者はイラン・パペと会ったことも記しています。パペは、シオニズムによるイスラエル建国が民族浄化を不可避に内包していることを論証した人で、私もどんな人物か知りたかったので、興味深く読みました。著者はパペをエドワード・サイード亡き後のパレスチナ問題を正當に論じることのできる稀有な人物の一人として評価し、「彼の中に困難な状況を生きるイスラエル知識人の誠実さを見ていた」と言う。

パペはハイファ大学政治科の教授で、シオニズムを批判し「建国神話」を実証的に切り崩していく中で、イスラエルの歴史学会で孤立し、大学はパペの追放を決定した。にもかかわらず、彼が大学に留まったのは、国外からの反応の大きさがあったため、教授会への出席は拒否されたままのこと。

著者は「イスラエルに滞在してわかったことの一つに、この国のアカデミズムでは研究者の自由な思考や発言がたやすく政治的な物議を醸し、その人物

を危うくさせるという事件がしばしば生じていることがあった」と、述べています。

パペは著者に語っています。「イスラエルとパレスチナの間で、1968年以来なされたあらゆる協定は、ことごとく失敗している。なぜか？ それは1948年の時点に遡って検討することを怠ったためだ。自分の意見は複雑なものではない。あらゆるパレスチナ人が本来の土地に帰還できる権利を認められなければならないということだ」と。

ドイツ系ユダヤ人のパペは、ハイファに生まれ、アラビア語を教える私立学校に通い、クラスにアラブ人の生徒がいたという。ユダヤの政治シオニズムの独善の側からでなく、公正にとらえる視座はそうした環境で培われたのだらうと思いつつ読みました。著者はこのようにイスラエル国内のイスラエル人ばかりかアラブ人、さらには危険な攻防の続く西岸地区のジェニンを含む各地や、そこでの建設中の分離壁や検問の現状をわかりやすく記しています。イスラエルの内情を知ることができると同時に、シオニズム、パレスチナ問題をその都度解題しているので、パレスチナ、イスラエル問題の理解にも良い本だと思いました。

第二部はセルビアの姿、コソヴォ、ボスニアなど、パレスチナ、イスラエルでフィールドワークした同じ姿勢で、興味深い記述が続きます。ベオグラードが今も空爆の破壊のままに晒されているとのこと。戦後の輝きを失った街の様子は、チトー時代を知る者として、心痛い風景です。

著者のこの本のタイトル「見ることの塩」は、モスタルでの光景から生まれたようです。ボスニア戦争で、モスタルは最も激しい戦争があった所です。セルビア軍が撤退した直後に、ムスリムとクロアチア側住民たちによって、直ちに爆破されたセルビア正教会の瓦礫の向こうに、カソリック協会（クロアチアはカソリック教徒が主流）の尖塔と十字架が見えた。「私はたとえようもない疲労感に襲われた。すべてのものが廃墟であるという現実を前に、嫌気がさしてきたのだ」として、詩人高橋睦郎の二行の詩を思わず口誦さんだという。

「私の見ることは塩である。

私の見ることに癒しがない。」

「人権」「人道」の国際社会の二重基準、「公正」が実現されず、延々と続く敵対を見る時、怒りは時として徒労感を生む、そんな思いが「見ることは塩」なのでしょう。（8月30日）

「かつて10・8羽田闘争があった」（10・8山崎博昭プロジェクト編・合同フォレスト刊）を読みました。

この本は、50年前ベトナム侵略戦争に反対し、佐藤首相ベトナム訪問に反対し、立ち上がった若者たちが羽田空港周辺で闘い、その中で虐殺された山崎博昭君の追悼と、当時の闘いを明らかにし、歴史に刻むために編まれた書です。

600ページ以上もあるこの本を10月6日に受け取り、10月9日まで一気に読みました。気持ちとしては一気ですが、物理的には徹夜で読むことができない獄で中断を余儀なくされつつ、一心に読みました。

初めに、博昭君の兄建夫さんが、弟がどんな子供だったのか、どんな家庭の中で育ったのかそして突然の死の衝撃を「あゝ弟よ君を泣く君死にたまふことなかれ」の題名の一文に想いを凝縮して記しています。この家族の思いを通して、当時の闘い、命知らずに使命感に燃えて立ち上がる若者たちと支えつつ案ずる家族の姿が痛いほどわかります。自分の周りの若者たち、ブントや赤軍派の友人たち、また、パーシム奥平、サラーハ安田、ユセフ槍森、ニザール丸岡らが、山崎君の「死」と連動して浮かび、胸を熱くさせます。

この本はそのあと、第1部から第4部に分けて編まれ、第1部では、このプロジェクトに関わった方々中心に10・8から50年を経ての総括的な感慨が記されています。50年前救援に関わりこのプロジェクトに加わった水戸喜世子さんや山本義隆さんら大手前高校の同志、同期の方々です。どの方々も10・8闘争とそこでの山崎君の「死」がそれ以降の運動の飛躍の出発点であり、またそれぞれの人生に大きな影響を与えずにはおかなかったことを深く語っています。10・8闘争が同世代の人々の結び目であり、それ故再び50年後に共通の思いを持ちえたことが伝わります。

第2部では、67年10月8日闘争に共に参加した山崎君の学友や戦友たちによる、弁天橋やその付近での攻防を中心に編まれています。日本が再び侵略戦争の道に加担することを許してはならない！と、不退転の当時の懸然とした時代がよみがえります。ここでは、戦友、友人たちが山崎君がどのような部署について闘ったのか具体的に詳細に語っています。

私もこの本に一文を寄せましたが、私の文が記憶違いの不正確さがあると読みつつ思いました。一つは、10・8当日ブントや私たちは、鈴ヶ森ランプ出入り口から高速道路を駆け登ったのですが、私は「逆走した」と書きました。しかし、「出口」でなく「入り口」だったら、「逆走」ではないと。もう一つは、私は高速道路上で、機動隊の「ジェラルミンの盾と金属棒でデモ隊の頭を殴ったり蹴ったりしている」と書いたのですが、まだジェラルミンの盾は無かったのか？ 68年の記憶と混同してしまったのかもしれませんが。他の方々の手記を読みつつ思いました。それに部隊「数百人」と書きましたが、情報誌では、この時のブント社学同らは、1200人、1000人と書いている人もいます。確かめずに書いたため、不確かだったと思います。

第3部は、「同時代を生きて、山崎博昭君の意志を永遠に」と、様々な立場、年代の方々の視点からの文や10・8のこのプロジェクトに賛成した意志のコメントなど。折原浩論文も収められています。

第4部は、「歪められた真実」。これは圧倒的説得力があります。この第4部の真実から改めて逆に第2部の手記をじっくり読み直した程です。（第1部にも当時の遺族を代表した小長井弁護士も記しています。）この第4部の「50年目の真相究明——山崎博昭君の死因をめぐって」がそれです。辻憲と10・8プロジェクト事務局が執筆し、調査で到達した地平、事実の再現に向けた詳細な聞き取りと図解説明によって正確に真実が明かされています。当時は、「山崎は学生の運転した車に轢き殺された」とか「暴徒キャンペーン」が激しかったのを思い出します。検死前から「轢殺説」を流しながら、自供攻勢でも結局つじつまが合わせられず、犯人学生説は失敗だったことも記されています。

また、この文で初めに山崎君を検死した牧田病院長の発表では、「直接の死因は頭蓋底出血と頭蓋骨折だがタイヤの跡は認められなかった」と述べたものが変更修正されたり、警察の国会答弁もつじつまが合わないなどを、この中で明らかにしています。

この警察のねつ造の記述との関連で、辻憲は60年安保闘争で殺された樺美智子さんに言及しています。2010年に樺さんの「死の真相」が明かされていたことをこの文で私は初めて知りました。

（「樺美智子さんの『死の真相』——60年安保の裏で」として、2010年12月公表された。筆者は九屋博医師。60年6月16日に樺さんの遺体を



司法解剖のため慶応大医学解剖室で、中館教授執刀で行われ、その口述筆記したものを九屋博が当時の解剖学の著名な権威、草野教授に鑑定してもらうために持参し、そこで死因の説明を受けた。

丸尾は自ら樺さんの残されていた臓器を確かめた上で、「神庭さんは腹部に（警棒状の）鈍器で強い衝撃を受け、外傷性脾頭部出血、さらに扼頸による窒息で死亡した」という結論をまとめたという。（実際、樺さんと一緒にいた女学生は命はとりとめたが、同様の重傷で入院。）

検察に提出したこの「第一次鑑定書」を、検察は受け取りを拒絶して書き直しを迫った。それで、執刀医の中館教授は修正を加えて「第二次鑑定書」を作成したが、それでも検察は不都合で使わず、解剖の一部立ち会っただけの東大の上野教授によって別の鑑定書が作られた。そこで、「人なだれによる圧迫死、内臓臓器出血も窒息によるもの」と変更した。そして第二次鑑定書も闇に葬った。このように九屋博医師によって50年を経てその経緯が明らかになった。

闘う側にいた私たちは、詳しい山崎君の死因は知らずとも「権力による虐殺」であり、怒りと共に次の11月闘争に向かったのです。50年を経て、改めてその詳しい実証に当時のデモで、激しく対峙した権力の殺意をよみがえらせて、身震いしてしまいます。しかも巧妙に権力は真相を葬った。歴史に繰り返されている権力の姿を、反戦平和を求める市民運動の側から露にし、今現在の深まる「共謀罪」「安保法」「改憲」に立ち向かう一つの力として、この本を多くの方々に読んでもらいたいと思いました。

(10月13日)

## 10・8羽田闘争50周年

### 10・8山崎博昭プロジェクトの活動について

—羽田闘争から50年 かつて、今も、これからも反戦の意志を伝える—

2017年10月8日午後4時より、10・8山崎博昭プロジェクト主催による「羽田闘争50周年—山崎博昭追悼—」集会在東京・四谷の主婦会館で開催されました。

この集会は、50年前の1967年10月8日、佐藤首相(当時)の南ベトナム訪問を実力で阻止するため闘われた第一次羽田闘争の中で、機動隊と激突した羽田・弁天橋の上で亡くなった京大生山崎博昭君(享年18歳)を追悼するとともに、かつて、今も、これからも反戦の意志を伝えるものとして開かれました。

集会に先立ち、午前、羽田・弁天橋の隣でプロジェクトの発起人挨拶と献花・黙祷がありました。献花・黙祷には80数名の方が参加し、その後、第一次羽田闘争の出撃場所となった大田区萩中公園に隣接する「福泉寺」で50周年の法要を行いました。この「福泉寺」の墓地には、プロジェクトにより、今年6月にモニュメントとして「山崎博昭」の名を刻んだ墓石と、第一次羽田闘争と反戦平和を祈念する文章を刻んだ墓誌が建立されています。

午後4時からの「羽田闘争50周年」集会は3部構成で行われました。第一部は「50周年を迎えて三事業の報告」。プロジェクトの代表である兄・山崎建夫氏からの挨拶、発起人によるプロジェクト事業と、現在、ベトナム・ホーチミン市の戦争証跡博物館で開催中の展示会の報告などがありました。

第二部は「羽田闘争と今」。冒頭、発起人の詩人・佐々木幹郎氏が山崎博昭君の死を追悼して作った詩「死者の鞭」を俳優の品川徹氏が朗読、続いて発起人の水戸喜世子さんが「10・8と反原発の今をつなぐもの—私にとっての10・8—」というタイトルで記念講演を行いました。続いて、今回の集会に合わせて来日したベトナムのツーズー病院平和村ニ代表から挨拶がありました。その後、ホーチミン市戦争証跡博物館元館長などからのメッセージが読み上げられました。

第三部は、発起人の歌人・福島泰樹氏による「山崎博昭に捧げる 短歌絶叫コンサート」が行われました。集会終了後、同会場で、50周年を記念した

パーティーが開かれました。

集会参加者は約220名と大盛況でした。

この羽田闘争50周年に至る、10・8山崎博昭プロジェクトの活動の経緯を辿ってみたいと思います。プロジェクトは2014年に立ち上がりました。

#### 10・8山崎博昭プロジェクト 趣意書

「わたしたちはここで泣く！」

1967年10月8日という日付と、この日に羽田の弁天橋の上で、18歳で亡くなった山崎博昭の名前を、わたしたちはいまも忘れることができません。

山崎博昭の死は、1960年の反安保闘争のとき、国会議事堂前で亡くなった樺美智子さん以来の、学生運動のなかでの死でした。

戦争に反対する。その一点で二人の死は共通していました。67年10月8日の羽田闘争は、当時、ベトナム戦争が続いていたなかで、日本の首相が羽田空港から出発して南ベトナムへ向かおうとしたことへの異議申し立てでした。日本がベトナム戦争に加担することを阻止しようとする学生たちの闘いでした。

山崎博昭は大阪府立大手前高校時代から反戦運動に参加しました。寡黙で成績優秀で、おとなしい青年だったことは級友たちの誰もが覚えています。その彼が京都大学文学部に入学して半年後、当時の三派全学連の一員として羽田闘争に参加。弁天橋を渡って羽田空港へ向かおうとした学生たちと機動隊との間で激しい衝突があり、彼は橋の上で亡くなりました。

わたしたちは、山崎博昭の死は、戦争に反対した人間の死としてだけ理解しています。なぜ彼があの日、弁天橋の上でいたのか。戦争に反対する意志表示をするためです。

一人の無名の若者の小さな死。その小さな死こそ

が、わたしたちにとって、いまも大事です。

この不幸な事件に接して、人生が変わったという人もいますし、当時の学生運動に関わらなかった人でも、この日のことを記憶にとどめて、自らの青春時代の激動の象徴にしてきた人もいます。わたしたちの世代は、10・8羽田闘争を経て、全共闘運動へつながる大きな学園闘争の渦を経験しています。その原点となったのが、10・8でした。

あれから半世紀が経とうとしています。

1967年10月8日という日付と、山崎博昭の名前を聞くと、わたしたちはいまも泣きます。

半世紀という歴史の時間を経て、羽田の地に、弁天橋にほど近いところに、山崎博昭を追悼する小さな鎮魂碑を作ろうと、わたしたちは発案しました。日本が徐々に戦争に向かいつつある現在、このプロジェクトは、山崎博昭の名前とともに、わたしたちがいまも、これからも戦争に反対し続けるという意志表示でもあります。

ご賛同いただけますように、お願い申し上げます。

2014年7月4日

「10・8山崎博昭プロジェクト」発起人一同  
山崎建夫(山崎博昭兄) 北本修二(弁護士、大手前高校・京都大学同期生) 佐々木幹郎(詩人、大手前高校同期生) 辻恵(弁護士、同前) 三田誠広(作家、同前) 宮本光晴(経済学者、同前) 山本義隆(科学史家、元東大全共闘議長、大手前高校同窓生) 上野千鶴子(社会学者、京都大学同期生) 鷲田清一(哲学者、京都大学同窓生) 川村湊(文芸評論家) 金城実(彫刻家) 高橋源一郎(作家) 福島泰樹(歌人) 道浦母都子(歌人) 小長井良浩(弁護士、当時遺族代理人) 水戸喜世子(十八羽田救援会) 山中幸男(救援連絡センター事務局長)

このプロジェクトの具体的な活動目的としては、山崎博昭の没後50周年となる2017年に

(1) 羽田・弁天橋の近くに、山崎博昭を追悼するためのモニュメントの建立

(2) 山崎博昭の死因を究明し、この50年をふり返る記念誌の刊行

のふたつを目的として出発しました。

その他に、当初から進行していた企画がありま

す。1967年10月8日の第一次羽田闘争は、ベトナム戦争に反対する学生と青年労働者による闘いでした。その闘いについてベトナムの国民に歴史的な情報を伝え、未来につながる国際的な反戦運動の礎にしたい、という願いがありました。つまり、

(3) ベトナム・ホーチミン市(旧サイゴン市)の「戦争証跡博物館」に、山崎博昭の遺影とともに第一次羽田闘争の記録を展示する、というのが、3つ目の目的でした。

この3つの活動目標は、羽田闘争50周年の10月8日を前に、成し遂げられました。

以下、それぞれの活動目的の現況について説明します。

(1) モニュメントの建立、

モニュメントについては、プロジェクト発足当初、羽田・弁天橋近くの民有地に山崎博昭君を追悼する記念碑を建てることを目指していましたが、さまざまな壁に突き当たり、民有地取得は困難を極めました。民有地取得と並行して、寺院での墓地探しにも取り組んできましたが、最終的に大田区・萩中公園に隣接する福泉寺(浄土真宗本願寺派)のご住職が私たちの希望をかなえてくださることになりました。

この福泉寺の墓地に「山崎博昭」の名を刻んだ墓石と、1967年10月8日の第一次羽田闘争および反戦平和を祈念する文章を刻んだ墓誌「反戦の碑」を併設し、この墓石と墓誌をモニュメントとすることにしました。今年6月17日にモニュメントの建碑式を行いました。

墓誌には以下の文章を刻みました。

一九六七年一〇月八日 アメリカのベトナム戦争に加担するために日本の首相が南ベトナムを訪問 これを阻止するために日本の若者たちは羽田空港に通じる橋や高速道路を渡ろうとし デモ禁止の警察と激しく衝突 重傷者が続出し 弁天橋の上で京都大学一回生 山崎博昭が斃れる 享年一八歳 再び戦争の危機が高まる五〇年後の今日 ベトナム反戦十数年の歴史をふり返り 山崎博昭の名とともに かつて、いまも、これからも、戦争に反対する というわたしたちの意志をここに伝える

二〇一七年一〇月八日

10・8山崎博昭プロジェクト代表・兄山崎建夫 建之

(2) 記念誌の刊行

記念誌には、プロジェクトの発起人、10・8 第一次羽田闘争参加者、当時の高校生、知識人、大手前高校及び京都大学の同期生・同窓生、10・8 羽田のニュースを聞いて、あるいは後年、山崎博昭君の死を知って衝撃を受けた方たちが、感銘深い文章を81篇寄稿していただきました。未発表の幾つもの当時の貴重な現証証言が含まれており、それらは第一次的な歴史的史料として価値あるものとして、いずれも、50年前のあの世界を揺り動かしたベトナム反戦闘争をふり返ることの大きな意味がおのずと浮かび上がってくるものです。それだけではなく、今現代につながる問題が深く示唆されています。

記念誌は今年の10月8日に「合同フォレスト」から発行されました。

山崎博昭追悼50周年記念「寄稿篇」

「かつて10・8羽田闘争があった」

・内容：①グラビア写真(山崎博昭アルバム、羽田闘争と弁天橋) ②山崎博昭の生涯(山崎建夫) ③山崎博昭の日記+対話+書簡 ④10・8から50年を経て(寄稿) ⑤1967年10月6日 羽田(寄稿) ⑥同時代を生きて 山崎博昭君の意志を永遠に(寄稿) ⑦歪められた真実

今後、「かつて10・8羽田闘争があった—山崎博昭追悼50周年記念・記録篇」(仮題)を来年6月に刊行予定です。

・内容：①1967年10月8日の羽田・弁天橋の時系列写真アーカイブ ②死因究明の関連資料 ③10・8羽田闘争の反響(新聞、雑誌、知識人の声明、冊子、チラシ、写真集、映画、演劇などの情報) ④10・8羽田闘争がもたらしたもの(当時の詩歌、小説、評論、エッセイなど) ⑤10・8羽田闘争の彼方へ(ベトナム・ホーチミン市「戦争証跡博物館」での展示内容、「10・8山崎博昭プロジェクト」の記録など)

第1巻、第2巻とも、1967年から50年後に初めて発表される現場証言が多数あり、歴史的事実を踏まえた同時代史として、たいへん貴重な資料となっています。

ご希望の方は、下記サイトよりお申込み下さい。

【10・8山崎博昭プロジェクト】

<http://yamazakiproject.com>

(3) ベトナム博物館での展示

10・8山崎博昭プロジェクトでは、昨年、東京と京都で「ベトナム反戦闘争とその時代—山崎博昭

追悼」展を開催し、多くの方々に来場していただきました。

現在、ベトナム・ホーチミン市の戦争証跡博物館において、当プロジェクトと博物館との共催により、8月20日から11月15日まで、「日本のベトナム反戦闘争とその時代」展として、日本での展示を更に充実させた展示会を開催しています。

この展示会ですが、何故、ベトナムで開催することになったのでしょうか。

まず第1に、アメリカによるベトナム戦争について、重大な長期にわたる世界史的出来事でありながら、現在のベトナムの若者たちがその歴史を知らない、ということがあります。

自国のかつての解放闘争の歴史を知らないばかりか、当時の世界各地でのベトナム反戦闘争も知りません。そのことは、日本の現在の若者においても同様です。

2015年夏、わたしたちはホーチミン市の「戦争証跡博物館」を訪ねました。

その時、館長から、日本での反戦闘争の歴史を総括した展示会を開催して欲しいと依頼されました。1960年代・70年代のベトナム戦争当時、日本の若者たちが過激に闘った反戦闘争の現実を、現在のベトナムの若者たちに知らせて欲しい、というのが館長の趣旨でした。展示会が終わった後、ベトナム全国で巡回展をすることも依頼されました。それがベトナム側から、わたしたちへの要望でした。

そして第二に、これまで「戦争証跡博物館」で紹介されていた日本のベトナム反戦闘争の歴史は、日本共産党とベ平連の資料だけでした。

当時のいわゆる三派全学連の学生運動や反戦青年委員会、労働者、市民のラディカルな運動は紹介されていません。

もちろん、1967年10月8日の第一次羽田闘争のことを、館長自身もまったく知らなかったのです。わたしたちが持参した写真など資料を見せたとき、「こんな激しい反戦闘争が日本であったとは！」と驚かれ、感動されたのです。

また、沖縄での島ぐるみの営々たる反戦・反基地の運動や各地の在日米軍基地での反戦闘争も、ベトナムの人々には、これまで何も知らされていません。これらのことは、日本でベトナム反戦闘争を闘った、わたしたちの責任でもあります。

「10・8山崎博昭プロジェクト」は、このことに、できうるかぎり、全力で応じることにした、という

わけです。日本でだけではなく、ベトナムでも、同じ「ベトナム反戦闘争とその時代」展をやる、ということ。実は、ベトナム側の依頼に応じるために、その準備段階として、日本で展示会を先行して開催したとも言えます。

同じようなことは、アメリカでもあるのではないのでしょうか。現在のアメリカの若者たちは、自国のベトナム戦争の歴史をどの程度知っているのでしょうか。また、自国と他国の当時の反戦闘争の歴史を果たしてどこまで知っているのでしょうか。

「戦争証跡博物館」を見学する旅行者で、最も多いのがアメリカ人です。しかもリピーターが多いのです。彼らにも、わたしたちの展示会を見てもらおうと思っています。

「何が生まれるか」——反戦の思想は国境を越えて共振します。そこに未来への可能性がある、と考えています。

この展示会に合わせて、当プロジェクトの企画により、約50名の方がベトナム博物館展示・ツアーに参加しました。8月20日の展示会のオープニングセレモニーでは、プロジェクトを代表して、山本義隆氏が以下の挨拶を行いました。

「10・8山崎博昭プロジェクトを代表してご挨拶を申し上げます。

はじめにベトナム戦争の時代における日本の反戦闘争に関するこの展示会を開催するにあたり、この機会を与えて頂いたホーチミン市戦争証跡博物館とホーチミン市人民委員会に心から感謝の意を表明したいと思います。

50年前、1967年10月8日、日本の学生組織である全学連が、この日、日本の首相・佐藤栄作が南ベトナム政府を公式訪問するのを阻止する目的で、日本の東京の国際空港、羽田に向かっておりました。その羽田空港に至る橋の上で武装した警官隊が学生に襲いかかり、そして大学生、山崎博昭君が命を落としてしまいました。当時、南ベトナム政府はすでに民衆の支持を失い、その南ベトナム政府を軍力で支えていたアメリカは、南ベトナムの農村を破壊し、北ベトナムの都市を空爆しておりました。そして日本はその米軍に対して軍事基地を提供し、かつ様々な軍事物資を提供しておりました。ベトナムはフランス帝国主義とアメリカ帝国主義に勝利した世界で唯一の国であります。そういう意味において私はベトナムという国を偉大な国だと思っております。

ます。日本は1940年にフランスの支配下にあったベトナムに軍を進め、そのことが一つの原因となって、ベトナムに飢饉がもたらされ、多くのベトナムの人たちが命をなくしたことが知られています。それから四半世紀のち、1960年代中期に日本は再び、アメリカのベトナム戦争に加担したのです。1967年に日本の首相が南ベトナム政府を公式に訪問することは、南ベトナム民衆に敵対することを世界に公表し、そしてアメリカの軍事戦略を政治的に支持することになります。これは、日本の心ある民衆にとって許すことができないことであったのです。山崎博昭君の犠牲という、尊い命を奪った、あの日の全学連の行動は世界に日本の良心を示したものだと思っております。

それ以来、日本の反戦運動は、学生、労働者、農民、そして多くの市民によって長年にわたって闘われ続けました。アメリカの原子力空母の日本寄港を阻止する闘い、米軍基地拡張を阻止する闘い、野戦病院開設を阻止する闘い、そして米軍のジェット燃料輸送を拒否する闘い。さらには、沖縄における米軍基地の基地労働者の闘いへと日本の闘いは発展していきました。さらに、日本国内における米軍基地からの脱走兵の支援の運動、脱走を呼び掛ける運動、さらには、上官の命令に対する拒否をする運動などを闘って、在日米軍への働きかけを強め、そして日本の国内ではさらに新国際空港の建設に反対する農民の反対運動や、自衛隊の内部からさえ反戦の訴えがあげられていったのです。この間の日本の民衆の闘いは、日本の民衆がはじめて世界の歴史に手をかけた希少な経験だったと思っております。

今回のすなわち10・8山崎博昭メモリアルエキシビジョン、これは私たちが取り組んできた展示会でもありますけれども、それは山崎博昭君を追悼するとともに、あらためて反戦、戦争に反対することの意義を現代において問い直そうとする試みであります。この企画がベトナムの人たちと、日本の民衆の間の友好と連帯を深め強めることを心から祈念しております。最後にあらためて、この企画を推進しこの企画の実現のために力を尽くしてくださった、この戦争証跡博物館のヴァン館長と、およびスタッフの皆さまに心からの感謝の念を表明して、私の挨拶に代えたいと思います。」

以上、10・8羽田闘争60周年を迎えて、10・8山崎博昭プロジェクトの活動の経緯と現況を紹介しました。(Y)

## 「バルフォア宣言」の時代とパレスチナ —バルフォア宣言百年に—

重信 房子

2017年11月2日、「バルフォア宣言」から100年目を迎える。ロシア革命直前の出来事であった。

2016年9月22日、パレスチナの自治政府大統領のマフムード・アッパースは国連総会で演説し、1917年の「バルフォア宣言」から間もなく百年になるとして、英国政府に謝罪とパレスチナ国家の承認を求めた。「バルフォア宣言が生んだ悲劇や不正に対するパレスチナ人への謝罪を含む責任を引き受け、国家承認を含めて改善に動くことを英国に求める」と。

後に「バルフォア宣言」について触れるが、「バルフォア宣言」は、パレスチナ人・アラブ人にとって過去の話ではない。現在の困難の原因であり、引き続き大破局（ナクバ）を明日ももたらし続ける原因だからである。

中東の戦乱は拡大し続けている。住民は、空爆、砲撃に殺され、あるいは居住地を追われ、夥しい規模で難民化を強いられている。こうした混乱の中「中東和平」の試み、交渉は益々遠ざかっている。逆に言えば、「中東和平」の失敗が現在の混乱を作り出しているとも言える。

「中東和平」とは一体どんな事態を指すのか？「中東和平」はなぜ実現されないのか？中東を理解する上で、もっとも基本的な問題がそこにある。「中東和平」は、パレスチナとイスラエルの間の和平のみを意味しない。アラブ全体とイスラエルに関する和平の問題である。

今パレスチナが直面している問題——イスラエルによる変わらぬ、むしろ加速している西岸地区の入植地拡大、周期的なガザに対する民族浄化政策やパレスチナ国家の首都となる東エルサレムの「ユダヤ化」のため、パレスチナ人の住居を破壊、追放し、アル・アクサーモスクの礼拝まで、禁止したり制限したりしている問題。さらには、西岸地区でのパレスチナ人に対する差別弾圧、虐殺——和平交渉を拒むイスラエル政府の引き続き占領は、パレスチナだけの問題ではないし、パレスチナだけで解決できる問題でもない。それが、あたかも「パレスチナ問題」、しかもアッパースPLO議長兼自治政府大統領に科さ

れた問題のように、切り縮められている風潮がある。こうした「中東和平」は欺瞞である。しかし、また「中東和平」の根本は「パレスチナ問題」の発生にある。

### 1、「シオニズム」の登場

「パレスチナ問題」を複雑な宗教問題とか何千年もの歴史をおびた問題のように考える人がいるが、決してそうではない。

パレスチナ問題の直接的発生は、第一次大戦中、大英帝国が「シオニズム運動」に加担し、パレスチナの地にユダヤ人の民族郷土を打ち建てる約束「バルフォア宣言」を発したことに原因がある。それが、更にその後の「イスラエル建国問題」に至った。つまり第二次大戦の後、ナチスの大量虐殺を頂点とする欧州におけるユダヤ人迫害や問題の処理を、かつての欧州の植民地であったパレスチナに押し付けたことによってパレスチナ問題が発生した。

大英帝国が「シオニズム運動」に加担したと述べたが、「シオニズム運動」とは何か？イスラエルでは「パレスチナにユダヤ人国家を建設するというユダヤ民族再生運動」と定義されている。

何故シオニズムが唱えられはじめたのだろうか？ユダヤ人・ユダヤ教徒はキリスト教社会において十数世紀にわたって苛酷な迫害を受けてきた。「キリスト殺し」の種族とされ、棄教や追放を強制され差別と困窮に置かれてきた。「ゲットー」と呼ばれるユダヤ人居住地域の困いの中に強制的に住まわされ、国籍も与えられず職業も制限されてきた。

こうした状況を変えたのは近代ヨーロッパ史を拓いた「自由・平等・友愛」の仏革命によってである。この仏革命の原則のお陰で、ユダヤ人はロシア支配地区を除く欧州で制度的にも解放され、職業の自由や議会の立候補の権利を得た。また、産業資本主義の発達と仏革命の新しい価値観はこれまでの封建的な領域国家から新しい民族・国民国家を形成していく流れをつくり出した。欧州の近代主義は民族・国家形成を拓いた時代であったと言える。この時代にあつてユダヤ人たちにも変化が生まれた。ウォルター・ラカー（「ユダヤ人問題とシオニズムの歴

史」の著者）によると、19世紀初頭の世界のユダヤ人の人口はおよそ250万人で、その90%は欧州各地に居住していたという。独には20万人居たが、ユダヤ人の大部分はまだ大都市への居住を許されず、ベルリンではわずか3000人が居住を許されたにすぎず、市民や都市ギルドは依然として反ユダヤ主義が続いていた。一方で巨大ユダヤ財閥は富を蓄積し、各国の欧州支配層に金融資本として結びつき、特権的な地位を築いた。1807年には、すでにベルリンではユダヤ金融機関の方が非ユダヤ人より力を持ち、どの政府もユダヤ資本なしには借款の調達は不可能であったという。この頃ユダヤ人社会の中に職業構成変化が起こりはじめ、大多数は極貧の中にありつつ、知的職業や小売り、工業へと就業する層が拡大し、社会的同化が始まったとラカーは記している。その後1871年には独仏戦争が起き、敗れたナポレオン三世が降伏し、パリコミューンがつくられ、市民が初めて権力を握ったが、当時の青年たち、とりわけユダヤ人青年にも大きな影響を与えただろう。

19世紀後半にはユダヤ人の中にはすでに多様な傾向が生まれていた。強いて分類してみると、第1の傾向の人々は、ユダヤ教徒の伝統的な戒律や文化を守り、ユダヤ教徒として生きる人々で、多くは東欧中心にゲットーの中での生活を強いられていた。

第2の傾向の人々は、同化ユダヤ人「同化主義」と呼ばれる人々で、英・独・米などに居住し、キリスト教徒らと同じ国民として世俗的国家基準にもとづいて、市民的平等を求めその国で同化して生きる道を選んだ人々である。

第3の傾向の人々は、社会主義・国際主義のユダヤ人たちである。これらの人々はユダヤ人の解放をマルクス主義、社会主義にもとづいて、宗教や人種・民族国家のちがいを超えたプロレタリア解放の道に解決を求める人々である。レフ・トロツキーやローザ・ルクセンブルクなどロシア、東欧、西欧に及んだ革命運動、労働運動の担い手に多く見られる。中東においても、こうした社会主義、共産主義運動の先駆的役割を果たしたのは、ユダヤ人である。この社会主義潮流の中には、ユダヤ人の存在を特殊条件として「文化的自治」を唱えた「自治主義」勢力を加えることができる。全ユダヤ労働総同盟（ブント）がその中心勢力である。

更には第4に、言葉としては「シオニズム」とまだ表現はされていなかったが、のちにシオニズムと

よばれる潮流の人々である。この文では、この第4の潮流について述べていく。この流れはモーゼス・ヘスやスファルディームのラビのイフェダ・アルカライらが指し示した道である。その後反ユダヤ主義・ポグロムに衝撃を受けたオデッサの医師レオ・ピンスケルが「自力解放」の冊子を発表し、自己の力でパレスチナにユダヤ人共同体をつくり生きていくことを唱えた。

このころパレスチナにユダヤ人共同体をつくらうとか、パレスチナに移民してポグロムから逃れようとする勢力が生まれた。また、社会主義ユダヤ国家をパレスチナに作ろうとする社会主義シオニストや、のちに述べるテオドール・ヘルツルらの帝国主義権力と協力してパレスチナに「ユダヤ人国家」を作ろうとする政治シオニズムも登場してくる。

それよりも古くからあるアハド・ハアムの文化的・精神的シオニズム（あくまでもユダヤ人の精神的中心としての復興で、主権国家自体が自己目的ではないとして、政治シオニズムに批判的な文化シオニズム）もあった。アハド・ハアムの弟子のマルティン・ブーバーらのイスラエルの地にユダヤ教文化のルネッサンスを興そうという「文化シオニズム」もあったし、「宗教的シオニズム」もあった。シオニズム潮流には多様な流れが存在しはじめていた。

ロシア帝国下では1881年3月にロシア皇帝アレクサンドル二世が革命グループ「人民の意志」によって暗殺されると、アレクサンドル三世は反政府活動家やユダヤ人に対して復讐的な法令や弾圧を始めた。こうした中でポグロム（ユダヤ人虐殺）が発生し始めた。多くのユダヤ人は虐殺攻撃から逃れて、中欧・米・オスマン帝国支配下へと移住するようになった。これまでもユダヤ人は巡礼ばかりか宗教的、文化的意味でパレスチナに入植する者たちが居た。

当時はまだ「シオニズム」という言葉は発明されていなかったし、こうした入植者たちはパレスチナに排他的なユダヤ人の領域国家を作るという考えではない。イスラーム教徒、キリスト教徒と共存して暮らしていた。しかしポグロムの発生によって青年たちを中心にパレスチナへの入植活動を組織的に実践するようになった。学生の「ビールー」グループや「シオンを愛する者」と名乗る小さなグループなどがパレスチナにユダヤ人コミュニティを「定住させる」（「イシューブ」という）ことを目指して、移民の波を組織した。

1884年にはパレスチナに移住し、ユダヤ人共同体を組織的に行うために国境を越えた組織「シオンを愛する者」をつくりあげた。レオ・ピンスケルがその長に就いて、寄付を集める活動を活発化した。こうした動きに対して、オスマントルコ政府はユダヤ人移民の入国を制限した。(1885年)「シオンを愛する者」はユダヤ民族再生と大量移民を目指したが、財政的にも法的にも困難に直面していた。しかし、これらロシアやポーランド、ウクライナの「シオンを愛する者」たちの活動に共鳴した人々がウィーンやドイツ帝国・仏でも活動を受け入れた。ポグロムやドレフュス事件(仏のユダヤ人大尉ドレフュスが機密を漏洩したとして有罪判決を受けた事件。後に無罪と判明したが、反ユダヤ思想による冤罪であった)は、青年にシオニズムへの希望を広げたのである。

「シオニズム」という言葉は1892年1月23日にウィーンで開かれた会議でナタン・ビルンバウムが発案して初めて公に用いた言葉であったという。これまで「シオンへの愛」と表現されてきたものが、これをきっかけに「シオニズム」という明確な運動の言葉になった。「シオン」とは旧約聖書におけるエルサレムの呼称の一つである。エルサレムのシオンの丘に帰る、つまりパレスチナにユダヤ人の故郷を再建する運動として語られるようになった。その結果、すでに述べたように様々な「シオニズム」が生まれたい。「博愛シオニズム」「実践シオニズム」など先述の他にもいろいろな「シオニズム」があった。

こうした流れの中、テオドール・ヘルツルが1895年、著書「ユダヤ人国家」を出版した。ヘルツルはこの本を出発点に政治シオニズム運動を世界に広げ、大規模なその力でユダヤ人国家を作ろうと始めたのである。ヘルツル自身は同化ユダヤ人のブタペスト生まれのジャーナリスト・劇作家で、ユダヤ教には冷淡な人物であった。この本の3年ほど前にヘルツルが友人にあてた手紙では、ユダヤ人はキリスト教への洗礼や通婚によってユダヤ人問題を解決すべきだ、と述べていたという。しかし「ドレフュス事件」をパリで特派員として滞在中に現認し、ヘルツルは、どのように同化しても反ユダヤ主義は消えないと考えるに至ったという。それで「分離」つまりユダヤ人が絶対多数を占めるユダヤ人国家建設に向けて全力を注ぐことにした。ヘルツルはこの著書の中で「私が考案するものは何ひとつない」と表

明し、これまで何度も語られてきた古いユダヤ人国家を今こそ実現すべきだと力説している。

この本の中で示されているヘルツルの描くユダヤ人国家とは、第1に、西欧中心の西洋文明崇拝であり、その文明の鑄型の中にユダヤ人国家を描いている。ヘルツルは次のように記している。「我々は一民族である。……我々には一つの国家、それも模範的国家を形成するだけの力があるのだ」として「もしも(オスマン帝国の)スルタン閣下が我々にパレスチナを与えるならば、我々はその代償としてトルコの財政を完全に管理することを申し出るであろう。欧州のために我々はその地でアジアに対する防壁の一部を作り、野蛮に対する文化の前哨の任務を果たすであろう」とし、パレスチナにある全キリスト教徒の聖地のためには治外法権をもって守ると表明している。つまり欧州帝国主義の植民地支配の先兵の役割を果たすユダヤ国家を描いている。

第2に、ヘルツルは領邦君主権者たちと話し合い、あるいはそれらの権力の保護の下で国家を打ち立てるとしている。つまり帝国支配層からユダヤ人国家の「特許状」を得ることを建国の方法とした。「最初の目的は、すでに述べたように我々の正当な必要を充たすに十分な広さの地域に樹立される国際法上保護された主権である」として、以降ドイツ皇帝、英・仏支配層、オスマン帝国スルタンなど権力者の許可によって国作りを求めていった。こうした方策は必然的に植民地支配下にある人民に敵対せざるをえない。

第3に、同化ユダヤ人のヘルツルにとって、ユダヤ人の領域国家は必ずしもパレスチナではなかった。本の中では、ヘルツルはパレスチナとアルゼンチンを検討している。パレスチナの方がユダヤ人にとって歴史的愛着があり、移民が容易であろうという考えであった。もちろんこうした考えは「シオンを愛する者」らロシア・東欧シオニストらの反対にあう。ヘルツル死後、英国政府からウガンダなどの案も提案されるが、パレスチナに固執していくことになる。

第4に、ヘルツルの国作りは「ユダヤ人協会」と「ユダヤ会社」を作り「ユダヤ人協会はユダヤ人たちの新しいモーゼなのである」とし、「ユダヤ人協会が科学的、政治的に準備したものを、ユダヤ会社が実際に遂行する」としている。政治的ばかりか経済的にも国家代執行業務の構想を示した。また神権政治を否定し「信仰が我らを一につなぎ止め、科学が我々を自由にする」とし、「だれも自分の信仰ない

し無信仰にかけては、国籍の場合と同様に自由であり制約されない」と近代欧州の世俗基準を示している。

ヘルツルのユダヤ人の「分離」とは、ユダヤ人の西欧への集団的同化とも言えるものであった。また、言語においてはユダヤ文化への愛着は乏しい。イーディッシュ語については「我々がいま用いている歪められた抑圧された汚い言葉、ゲット語を使う悪習を止めるべきだろう」と述べている。このようにヘルツルのユダヤ人国家はユダヤ教の宗教共同体を利用し、欧米世俗主義の価値観に基づく民族国家を作ろうとする矛盾に満ちたものであった。ヘルツルは個人による国家作りは「気狂いじみた物語」となるが、「多くのユダヤ人が同時に賛成すれば、完全に理に適ったことで実践は可能だ」と訴え、政治シオニズム運動を開始した。

そして、1897年、テオドール・ヘルツルやナタン・ビルンバウムのイニシアチブによって、スイスのバーゼルで、第1回シオニスト会議が持たれその実行が決定された。いわく、「シオニズムの目的は、ユダヤ人のために公法によって保証される郷土を、パレスチナに創設することにある」として、「バーゼル計画」を採択した。

「バーゼル計画」では、第1にパレスチナへのユダヤ移民労働者、農民による植民地化の促進、第2に世界のユダヤ人組織化のためのシオニスト機関をつくり、第3に各国政府に同意を得るための工作などを決定した。以来パレスチナへのユダヤ人入植・建国を唱える運動をシオニズム、その提唱者と信奉者をシオニストとして広げていく。筆者がこれ以降シオニズム、シオニストというのはこの「政治シオニズム」のことを指すこととお断りしておきたい。

シオニストは「土地なき民に民なき土地を」のスローガンでパレスチナへの入植を進めた。しかしそこには、紀元前1500年頃にユダヤ人が移り住む前から暮らしていた人々の子孫やその頃に移ったアラブ人が住んでいた。そのアラブ人たちはオスマントルコに百万人以上も虐殺され、逃れてきたアルメニア人を受け入れたように、はじめはユダヤ人の移民をあたたかく迎えた。ユダヤ人がパレスチナに、まさかユダヤ人の国家をつくることは、考えてもみなかったのである。シオニストはユダヤ資本家の力で、西欧植民地支配者と共同でユダヤ国家建設へと進んだ。



2、「バルフォア宣言」—パレスチナ問題の発生  
しかし、ユダヤ人には色々な考え方があり、ユダヤ人同化主義者たちからも「シオニズムによって反ユダヤ主義が増幅され迫害を増大させる」と批判が強かった。ヘルツルの政治工作にも関わらず、どの国の元首も色よい返事をした訳でもなかった。富裕なユダヤ人を味方につけて、上からの同化ユダヤ人エリートによる革命的展開には前進もあつたが、反論・反対も強く、「ユダヤ人国家」の本の出版から8年後、ヘルツルが死ぬまでうまくいかなかった。

第1回世界シオニスト大会の前夜のヘルツルの日記には「私は若造や乞食・騒ぎ屋を統率している。……彼らの中には、私を利用する者もいる。……二心なく熱心な者は、わずかにすぎない。にもかかわらず、もし成功が見えたら、この軍隊でも仕事を果たすだろう」と書いているように多難であった。ヘルツルの親友ハインリヒ・カーナは、ヘルツルのことを「度量が狭く、他の人々を評価する時には思いやりに欠け、傲慢で人一倍利己的であった」と記しているという。

第1回世界シオニスト大会をヘルツルと共に領導したナタン・ビルンバウムは「シオニズム」の命名者であったが、シオニズムの厳しい批判者となった。彼はヘルツルらエリート同化ユダヤ人が、ユダヤ人の文化、伝統を歪め、西欧中心主義によってシオニズムを進めることに反対した。ビルンバウムはユダヤ民族として、ユダヤ人のイーディッシュ語文化、信仰、伝統的価値観こそ、民族再生運動の中心と捉えたのである。当初は、文化シオニズムと政治シオニズムの統合をめざそうとしたが、のちにヘルツルらを批判し、イーディッシュ語と文化の保護に尽

くしている。ビルンバウムは、ユダヤ人はその生活の場において、ユダヤ人の伝統、文化の権利を護る活動をすべきだと訴え、自らもその活動に転じたのである。

このように、シオニズムの中には、西方の仏、独語圏や東欧の同化ユダヤ人アシュケナジームによる東方ユダヤ人への差別、ロシアシオニストによる西方シオニスト批判などが続いた。ロシアの第1次革命(1905年)の影響を受けたロシアの宗教的シオニズムや社会主義シオニズムの力も増大し、ヘルツルの死後、ロシアシオニストたちの勢力が拡大した。

こうした中、第一次世界大戦の勃発は、シオニズムにチャンスが巡ってくるのである。ヘルツルの切望した「特許状」のチャンスである。このように、シオニズムの性格は運動の始まりから決定していた。反ユダヤ主義に対抗した民族国家形成を求めつつ、その内実は、第1に西欧思想中心主義であり、第2に帝国主義の植民地支配の先遣隊を自負し、第3にユダヤ教・ユダヤ伝統文化を否定し歪めるものであり、第4に東欧や独・仏・英などの同化した西方アシュケナジームによる、東方ユダヤ人・ミズラヒームやセファルディームの文化に対する侮蔑など、その出発から差別構造を生んでいた。

歴史学者のユダヤ人、ヤコブ・ラブキンは、「イスラエルのある学者はこう述べた。『我々がこの土地を求める理由は単純だ。神は存在しない。だが、神はこの土地を我々に約束したのだ』と。この発言は、シオニズムは非宗教的な政治的主張であることをよく示している」と述べている。シオニズムはユダヤ思想とイコールではない。むしろ英・欧の帝国主義植民地支配と同質化し、ユダヤ教の「シオンへの愛」を利用して、帝国主義の前哨としてユダヤ国家を求める人為的な建国運動であった。その結果シオニズムは、アラブ・パレスチナ現地住民に対する侵略者として登場するのである。

オスマントルコに代わって中東を支配しようとした「英国の三枚舌外交」といわれる植民地政策にパレスチナ問題発生歴史的責任がある。一枚目の舌は、1915年、英国の在エジプト高等弁務官ヘンリー・マクマホンがメッカのシャリーフ・フサインに与えた書簡である。オスマントルコ支配に反乱すればアラブの独立国家を認めるという約束。この密約によって、フサインの三男ファイサル司令官のもと、アラブ軍は結成され、英軍と同盟して反オスマン・独立戦争を闘い抜くのである。

二枚目の舌は、レーニンのロシア革命後発見され、トロツキーにより暴露され脱退表明された16年のサイクス・ピコ密約=英仏露によるオスマントルコ崩壊後の中東植民地分割の秘密の約束である。これはマクマホン書簡を裏切った内容であった。つまりオスマン帝国打倒の暁には、仏と英・露でアラブ・トルコ領土を分割譲渡し合うという、マッカのシャリーフ・フサインのアラブ独立国家の密約を反故にする約束であった。

三枚目の舌は、17年、バルフォア英外相によるユダヤ人資本家ロスチャイルドらシオニストの要請にそったパレスチナでのユダヤの「民族的郷土」建設への支持表明のことである。この「バルフォア宣言」を錦の御旗として英国の植民地支配とシオニズムの同盟によってパレスチナの地が占領されはじめたことにパレスチナの悲劇がはじまったのである。

繰り返しのシオニスト工作が奏功して、バルフォア外相が当時イギリス・シオニスト協会の会長、ウォルター・ロスチャイルドに宛てた書簡が「バルフォア宣言」である。1917年11月2日のことであった。いわく「親愛なるロスチャイルド卿；英政府を代表して、私は、ユダヤ人・シオニストの願望への共感を表す以下の宣言をお伝えします。これは閣議で承認されたものです。『英政府はパレスチナにユダヤ人のための民族郷土を設立することに賛成し、この目的の達成を容易にするための最善の努力を払う。ただし、パレスチナに居住する非ユダヤ人社会の市民的、宗教的権利及び他の諸国におけるユダヤ人の享受する権利と政治的地位を損なうようなことはしない旨、明確に了解されること。この宣言をシオニスト連盟にお伝え頂ければ幸いです。1917年11月2日』という書簡である。この「お墨付き」を得て、後にシオニストによるパレスチナへの移民と建国が正当化されていくことになる。

この「バルフォア宣言」を生み出す「功労者」は、ハーバード・サミュエルとマーク・サイクスである。もちろん、英シオニスト連盟会長のウォルター・ロスチャイルドやロイド・ジョージ首相、バルフォア外相、英シオニストのトップのワイツマンも功労者である。ハーバード・サミュエルは、前アスキス内閣の内相の時から、上記パレスチナにユダヤ国家を主張したばかりか、ロイド・ジョージの組閣時、閣僚の招請を断った。その理由は、かねてからのシオニストとロイド・ジョージの約束で、彼が政権を握るとすぐに、シオニストと英政府の間で、かつて

ヘルツルの求めたパレスチナへの「特許状」の話し合いが行われるためであった。

1917年2月、ロンドンでユダヤ人代表団と英政府の初の公式会合がもたれた。このシオニスト代表団は、ワイツマンとロシアのシオニストのソコロフの他、ロスチャイルドに加えて、ハーバード・サミュエルが、変わり身で英代表ではなく在野の立場で、ユダヤ人代表団に加わっているのである。すでに述べたように、のちにパレスチナ初代高等弁務官として大活躍する予定の人物である。英国側を代表して討議を行ったのは、マーク・サイクスである。サイクスは、「サイクス・ピコ秘密協定」を仕切った英外交官である。彼はシオニズムに強く共鳴していた。マッカのフサインとも会っており、マクマホンの密約も知る人物であった。つまり、三枚の舌の調整実行者であったと言っていい。

シオニストの要求に対して、最終的に英国政府は、「パレスチナにユダヤ人のナショナルホームをつくる」という文面で、英国側は、パレスチナ全土ではなく「パレスチナの中のナショナルホーム」というINを入れて歯止めを示し、また、THEではなくA NATIONAL HOMEとしたという。加えて、非ユダヤ人社会の市民的宗教的権利保証の一項を加えた。こうした歯止めをかけたのは他の人物で、サイクスではなかったらしい。しかし、サイクスは後に死の直前、反シオニズムに転向する。

1919年にパリ講和会議の中で、アラブ地域の最終的地位を決定する前に、米・ウィルソン大統領の提案によって、アラブ地域へ調査団が派遣されることになった。仏は反対し派遣しなかった。米調査団は現地調査の上で、アラブの独立をすすめ、委任統治は期限を設けること、またパレスチナにおけるシオニストの横暴で危険な現実を調査し、ユダヤ人の移民を停止し、アラブ住民の保護や土地の収奪の制限を報告書に記した。

英代表団のサイクスも、パレスチナを視察し、衝撃を受けた。理想の解決と考えていたシオニズムによって、シオニストたちがアラブ人の土地を買い取り、強制的に小作を追放したり、各地に対立と憎悪が広がっていた。マーク・サイクスは現地アラブ人の要求を考えていなかった自らの過ちを自覚した。調査旅行から戻ると、直ちにシオニズムによる「バルフォア宣言」の履行が如何に誤りであり対立を作るか「バルフォア宣言」の再考を求め始めた。ところがその奮闘の途中、突然急死した。スペイン風邪

にやられたという。しかし、この1917年交渉の時点では、英国人マーク・サイクスとハーバード・サミュエルが、シオニスト以上の働きをして「バルフォア宣言」を結実させたのである。つまり「バルフォア宣言」は、これまでのシオニストの政治工作の勝利の結果であった。

以降、この「バルフォア宣言」の特許状を得たシオニストは、他のシオニズム運動や、同化主義者・宗教家たちと競合しつつ、建国へと乗り出していくことになる。しかしまた「バルフォア宣言」の文言にあるように、「ユダヤ人」と「非ユダヤ人」に分断した結果、これまでアラブ人ユダヤ教徒だった人々は、パレスチナの中では、ユダヤ人の間に組み込まれる対立を作り出していく。

### 3、「バルフォア宣言」の実施—英委任統治下のパレスチナ

第一次世界大戦でオスマントルコは敗北し、シリアは英と仏によって3分割され、現在のシリアとレバノンは仏の、パレスチナは英の委任統治領になる。

サン・レモ秘密会議は、中東地域の最終処理に関して、基本的に仏・英の要求に沿って、サイクス・ピコ協定修正案を採用した。つまり、アラブの独立を約束した「フサイン・マクマホン書簡」は、一顧だにされなかった。サン・レモ会議で、日本は戦勝国の一員として参加した。そして、「バルフォア宣言」を含んだパレスチナの委任統治に賛成した。日本は、パレスチナ問題発生当初から関わっていたのである。サン・レモ会議によって、英・仏の植民地支配が決定されたことが公に知らされたのは5月であった。アラブでは、このサン・レモ会議決定の1920年を、「ナクバ(惨禍)の年」として記録している。

サン・レモ会議決定を奇貨として1920年には、英委任統治領の初のパレスチナ高等弁務官はシオニストのハーバート・サミュエルが就任していた。このようにシオニストは深く英国中枢に力を持っていた。「英国委任統治」といっても、要は植民地支配であり、それをシオニストが行うということである。こうして、パレスチナへのユダヤ人入植がシオニストに都合良く進められたのは言うまでもない。サミュエルのパレスチナ赴任時の人口の割合は、パレスチナ・アラブ人9割、ユダヤ人口は多く見積もっても1割程度に過ぎず、土地も持っていなかった。サミュエルは土地購入、移民誘致(当時ユダヤ人はパレスチナではなく、米欧への移住人口が多かった)

など、将来のユダヤ国家の土台作りを行っていく。このサミュエルの英委任統治政府はシオニスト代表機関設立も許した。シオニストたちは、この機関を軸にヘルツルが「ユダヤ人国家」に描いたように、植民を通して社会のインフラや下部機構を作った。また、ユダヤ人の間に、政府に相当する「国家評議会」、軍の萌芽となる武装機関として「ハガナ」を設立し、ヘブライ大学を開校するなどして、着々とパレスチナにユダヤ国家をつくる準備に入った。

一方、当時のパレスチナ住民は、アラブ規模の反英反植民地闘争に立ち上がり、その一翼としてパレスチナの英国委任統治の正当性を認めず闘っていた。パレスチナの独立を求め、英国委任統治の「バルフォア宣言」を踏み絵とする行政機関作りを受け入れなかった。その結果、社会のインフラ、下部構造など国家の萌芽的な機能づくりには着手し切れていない。

1933年1月に、ナチス政権が成立すると、独からパレスチナへの移民が急増した。1922年の人口統計では、パレスチナ全人口75万2048人のうち、ユダヤ人は11%に過ぎなかったが、1931年には、人口103万3314人のうち、ユダヤ人の比率は約17%に増加した。1930年代には計29万人にのぼった。こうした急速なユダヤ人移民の増大は、更にアラブ側の組織的反抗を生んだ。1935年11月に、ハイファでモスクのイマームとして活動していた、イスラム運動の指導者シャイフ・イズディーン・アル・カッサームが英治安軍との銃撃戦の末、殺害された。カッサームは、シリアで反英反植民地闘争を闘い、亡命を余儀なくされて、ハイファに移って活動を続けていた。民衆に敬愛されていたカッサームの殉教が引き金になって、激しい反英闘争が始まった。

全土でカッサームを悼む葬儀が行われ、そこから武力を含む反バルフォア・反シオニズム・反ユダヤ移民の闘争に転じた。現在のパレスチナの組織「ハマース」の武装部隊は、このアルカッサームの殉教者に敬意を表して、アルカッサーム隊と命名している。この反英・反シオニズム闘争ではパレスチナ各地で民族委員会を結成し、主要勢力が統一戦線で闘い始めた。そして1936年4月25日、アラブ高等委員会という全国組織を結成した。アミン・フセイニーはその議長に押し上げられた。アラブ高等委員会は5月、当面の要求をユダヤ移民停止一つの要求にしぼり、4月ゼネストを宣言した。

そのゼネストは、全土で6ヵ月も続いた。同時に武装蜂起も各地で激化した。

英当局はアラブ高等委員会に対する鉄拳政策で弾圧した。シオニストの軍事組織ハガナ（のちのイスラエル国防軍・英の協力で育てられた）の協力のもと、英当局はパレスチナ・アラブ人の闘いを徹底してつぶした。その一方で英当局は、事態収拾のための調査団を派遣した。その結果1937年7月7日ピール委員会報告が公表された。パレスチナでアラブとユダヤ人の共存は不可能とし、一つのパレスチナにユダヤ人の「ナショナルホーム」を作ることを断念し、当面5年間はユダヤ移民を1.2万人に制限すること。パレスチナをユダヤ国家・アラブ国家・英委任統治地区に3分割することを求めた。

分割案では、ユダヤ国家はパレスチナの約20%領分で、テルアビブ、ハイファなど地中海沿岸を含むものであった。アラブ国家は、ネゲブ砂漠を含む70%以上であった。エルサレム、ベツレヘムなど戦略地点は英統治地区とした。シオニスト指導部のベングリオンは、それを原則的に受け入れるとした。初のユダヤ国家案であり、ベングリオンは息子への手紙で「これはユダヤ国家の始まりにすぎない」と述べているように、とっかかりと考えていた。

アラブ高等委員会は拒否した。7月23日の拒否回答では、第1にユダヤ国家予定地内のアラブ人の所有地は、ユダヤ人の所有地の4倍に当たり不公平であること。第2にアラブ国家には、これまでの経済活動の中心地が失われており経済基盤ができず、ユダヤ国家に依存する構造が作られている。第3にユダヤ国家は、将来の移民増加にこの領土で満足せず、新たな領土を要求してくると考えられる点などを示した。

英当局は翌38年に、今度は分割では解決できないという次の調査報告が出たり、混乱していた。

ピール委員会も英当局も「ユダヤ移民の停止」という要求に応えなかったことで、パレスチナ・アラブ人の闘いは更に広がった。英軍は増強し、各地のストライキ委員会を非合法化して、指導者の逮捕と国外追放にのりだした。37年11月には、緊急法令に基づく軍事法廷を設置した。ハジ・アミン・フセイニーを公職追放し、逮捕に乗り出したために、国外に逃れざるをえなくなった。それでも、各地で蜂起ゲリラ戦は続いていたが、激しい虐殺と弾圧のために徐々にパレスチナ・アラブの闘いは壊滅状態に至った。39年夏ころまでの3年間のアラブ側の

死者は約5000人、負傷者1.5万人から2万人といわれた。結局闘いながら敗北を余儀なくされた。

1939年欧州で第二次大戦の危機を迎えると、英国政府は、結局「バルフォア宣言」を反故にするようなパレスチナ白書（39年白書または「マクドナルド白書」と呼ばれる）を発表した。迫りくる戦争の危機に英国は政策転換を図ったのである。英国は、スエズ運河や陸路からペルシャ湾を通過して東アジア・インドに抜ける戦略的重要性のために、アラブ諸国をつなぎとめておく必要があった。そのため、アラブ諸国の独立や援助更にパレスチナ問題の方向が問われたのである。そこで39年2月ロンドンで、パレスチナ問題解決のための会議にアラブ諸国代表や、シオニストを招いて協議した。その後の5月、この「39年白書」が出されたわけである。

この新提案は、英はアラブ人の意思に反してユダヤ国家をつくることはないとして、10年以内にパレスチナ独立国家の樹立、この内でアラブ、ユダヤ人が政権を分かち合う。1939年4月から5年間に計7万5千人のユダヤ移民をパレスチナに受け入れる。また、難民対策として2万5千人のユダヤ人を受け入れるがその後は、パレスチナ・アラブ住民の同意によって決める。また、委任統治当局は、土地取引の禁止や制限の権限を持つなど、パレスチナのユダヤ人口を少数派として、全人口の3分の1に抑える方向を示した。

ユダヤ・シオニストはこの「39年白書」が「バルフォア宣言の約束を反故にした」と激しく反発し拒否した。アラブ側もまた拒否した。10年以内のパレスチナ国家建設など、但し書きで変更可能であり、英政府の中東政策の当面の都合にすぎないと見抜いていたためである。シオニスト・ベングリオンらは英国に見切りをつけ、米・ユダヤ社会を基盤とする米・シオニストを通じ、米政権に接近していくようになる。

第二次大戦が始まるとユダヤ人部隊は反ナチの闘いに英軍の一部として加わった。「39年白書など無いように英軍と共闘して闘え、戦争など無いように白書と闘え」、これがベングリオンの指揮であった。英政府がシオニストと距離を置くころ、ナチによるユダヤ人迫害と虐殺は、ユダヤ人のパレスチナへの移民や国家建設への米政府の協力や同情を獲得していった。

この機にシオニスト指導部は、1942年5月米・ニューヨークのビルトモア・ホテルに集結し、

「ビルトモア決議」を採択した。ビルトモア決議はナチのユダヤ人迫害を糾弾し、英政府の「39年白書」の撤回を求めパレスチナへの無制限の移民許可を求めた。更に、パレスチナへの移民の管理はユダヤ機関が行い、パレスチナはユダヤ人の共和国（コモンウェルス）として新しい民主的世界に統合されると主張した。パレスチナ全土にユダヤ人国家を要求する宣言として主張された初めての決議であった。米・ルーズベルト大統領は、サウジアラビアのサウード王に、パレスチナ政策の決定は事前にサウード王政と協議することを約束していたが、病気で急死した。後を継いだトルーマン大統領は、米・シオニストの選挙協力をあてにして、親シオニズム政策に動いた。ナチスのユダヤ人迫害と暴政がその契機でもあった。そして英当局が禁じていた10万人のユダヤ難民のパレスチナへの移民を許可するようトルーマンは英に圧力をかけはじめた。

一方シオニスト武装部隊は、移民制限を行う英政府に対する激しいテロ活動を繰り返した。1946年7月には英軍司令部の置かれたエルサレムのキング・デービッド・ホテルを爆破し、英当局民間人92人を死亡させた。その上シオニストは更にテロを加速した。こうした中で英国は、パレスチナ委任統治が利益にならず負担ばかりなので、委任統治を国連に返上することにした。

1947年4月2日英国政府は、国連に正式にその要請を行った。

1947年11月29日、国連総会でパレスチナ分割案（国連決議181号）が可決された。（賛成33、反対13、棄権10。国連加盟アラブ6カ国[エジプト、イラク、レバノン、サウジアラビア、シリア、イエメン]は反対投票。イギリスは棄権。この時点で日本は国連未加盟。パレスチナ人は決定権なく突然の「不幸」に直面した。）その時点でパレスチナ・アラブ人の土地占有率は、パレスチナ・アラブ人側93%、ユダヤ人側は7%にすぎなかった。しかし国連のパレスチナ分割決議によってパレスチナ・アラブの領土は42.88%、ユダヤの領土は56.47%、1%未満のエルサレムの地を国際管理下に置くこと決められた。シオニストのアメリカ・ユダヤ資本の政治力でユダヤ人の側が極端に大きな土地を得た。このパレスチナ分割決議すなわち事実上の「イスラエル建国」によってパレスチナ問題は発生した。

この「バルフォア宣言」以来のシオニズムの性格

から、イスラエル国家は、第1に冷戦下、反共反ソ戦略における帝国主義の基地となった。第2に国境に対する定義が意図的に行われていないように、1947年の国連の分割決議は、シオニストにとっては「とっかかり」に過ぎなかった。植民地拡張主義である。第3にその結果、ユダヤ・シオニスト構想の以前から暮らすアラブ住民たちによる反シオニズム、反イスラエル民族解放、占領地解放闘争を生み出した。それは非和協的にならざるを得ない。その結果として、イスラエルは、常に臨戦、戦争軍事国家化を自ら運命づけているのである。こうした統治において、第4に国内では、アラブ・パレスチナ人に対する人種差別支配を常態化させる。加えて第5にシオニズムの性格として、既に述べたように西欧中心主義の鋳型にユダヤ民族再生運動を当てはめたことで、イスラエル・ユダヤ人の中にアシュケナージを支配層とする構造的秩序を作り出し、セファルディーム・ミズラヒームなどアラブ東方圏を故郷とするユダヤ人の文化・伝統・習慣を差別する国となった。ユダヤ教徒らの反シオニズム勢力を生むのも必然であった。

イスラエルは、アラブ社会における自らの自己正当化を計ろうとすればするほど、年々右傾化の道を辿らざるを得ず、世界の基準、国際法、人権とかげ離れた自らの犯罪を、世界シオニズム、米政府など外的力によって守られる以外生き延びられない構造に陥るのである。

以上がパレスチナ・アラブ住民の犠牲と民族浄化の上に築いた、「バルフォア宣言」とシオニズムの奇形的結末「イスラエル」となった。

67年の第三次中東戦争のアラブ側の敗北から、もはやアラブ諸国に依存しては決して祖国は解放されないと、パレスチナ人民みずからが祖国解放に向けて立ちあがった。かつてパレスチナ政治家の亡命機関でしかなかったパレスチナ解放機構PLO (Palestine Liberation Organization) は、

解放闘争の担い手たちの機関として再建されていた。そして69年、アラファトがPLOの議長となった。以来PLOはパレスチナの武装解放闘争の司令部となった。

1993年9月13日「オスロ合意」によって、PLOとイスラエル政府は相互承認を行った。その際PLOアラファト議長は、ラビン・イスラエル首相への書簡で次のように述べた。「PLOはパレスチナ民族憲章の中で、イスラエルの生存権を否定したり、この書簡による確約と両立しないような条項が今や効力を失っていることを確認する」と。そして、パレスチナ民族憲章に必要な変更を公式に加えることを約束した。それに基づいて1996年パレスチナ国民評議会(PNC)において、「オスロ合意」に反する条項の無効と憲章の書き換えを賛成多数で採択した。更に1998年再びPNCにおいて、米クリントン大統領参席の下で、「オスロ合意」に反する条文の効力は無効であると採択した。しかし今に至るも、新しい民族憲章は、未だ存在しない。PFLPら「オスロ合意」反対勢力は、パレスチナ民族憲章の変更は認めていない。また、ファタハもパレスチナ民族憲章は廃棄した訳ではないという。

パレスチナに起きている現実、「バルフォア宣言」以来のシオニスト・イスラエル政府の変わらぬやり口に、シオニズムの定義や批判をはじめとするパレスチナ民族憲章の条項を人民が認めていない現実がある。この現実こそ、「バルフォア宣言百年目」のパレスチナの姿が示されている。(9月13日記)

追記 11月2日「バルフォア宣言」100年目のロンドン、かつてそれを決定した首都で、イスラエル・ネタンヤフ首相と英メイ首相は、「バルフォア宣言」を語り合った。パレスチナの声は、引き続き無視されたままにある。(11月3日記)

## 後記

現在、重信さんが収監されている八王子医療刑務所は、9月に移転すると言われていましたが、来年の1月になりそうです。12月に移ることもあり得ます。ただし、その場合、八王子刑務所に在監した拘留者に出された郵便物は、新しい住所に転送してくれることになっているそうなので、ご心配なく。なお、移転先の昭島市築地町に新設される国際法務総合センター(仮称)は日本初のPFI医療刑務所とのこと。丸岡さんに間に合えばよかったのにと、つくづく悔しい思いです。(Y)

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

《正誤》表

第 140 号

- ①11P左上から13行目 情報誌→「情況」誌
- ②11P左下から21行目 下から7行目 辻恵→辻恵さん
- ③11P右上から5行目 丸尾は→丸屋医師は
- ④11P右上から6行目 神庭さん→樺さん
- ⑤20P右 36 行、40 行目 ハーバード・サミュエル→ハーバート
- ⑥21P左上から6行目 ハーバード・サミュエル→ハーバート
- ⑦21P右上から2行目 ハーバード→ハーバート
- ⑧24P右 27 行目 民族憲章の条項を→民族憲章の条項変更を
- ⑨24P右下から 2 行目 語り合った。→祝し合った。